

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

森 正人



森正人・プロフィール

1950年福岡県生まれ。小学生の頃から貸本マンガに夢中になり、投稿するようになる。高校卒業後、上京して川崎のぼるのアシスタントに。70年、「小学四年生」でテレビドラマのコミカライズ「剣道一本!」でプロデビュー。以降、「少年サンデー」「少年キング」「パワーコミック」など、少年マンガと劇画の分野で活躍する。「新つれづれ草」のメンバーには珍しく、アウトドア派で料理が得意。



劇画の面白さに
はまった少年時代
マンガ家になる夢を持って上京

家族は両親と兄と姉、それから俺と妹。親父は戦争で満州に行つて、俺と妹は、親父が満州から帰つてきてからの子供なんだよね。兄と姉は戦争に行く前の子だから、ちよつと年が離れている。そんな家族。

親父は仕事を転々としていた。建設関係の仕事をしたり、久留米だからゴム工場に行ったり、それから醤油の行商をやったりしていたね。親父とはあんまり相性が良くなかったかな。よくあるパターンなんだけど、酒を飲んでいるときとシラフのときだと全然違つちゃう。ふだんは大人しいんだけどさ、酒を飲むとああだこうだと言うタイプ。お袋は専業主婦で、優しい人だったよ。呉服屋から仕事をもらつて、家で縫い物をしてい

た。

生まれたのは福岡の久留米。地方都市のなかでもけっこう大きい方というか、都会的な雰囲気があったと思う。松田聖子とかチェッカーズも久留米出身だね。芸能人が多いのよ。久留米は貸本文化が発達していて、小学校5、6年の頃から貸本屋に入り浸りになってき。さいとうたかをの『台風五郎』とかを読んでいた。あとは辰巳ヨシヒロとかね。もうバリバリの劇画。ちょうどその頃、「少年サンデー」と「少年マガジン」が創刊したのよ。でも、全然ピンと来なくてね。そっちを読まずに劇画の貸本にのめり込んだ。小学校のときは新聞配達をしてたから、貸本のお金はそれでまかなっていた。正直言って、家は貧乏だったので親からこづかいはもらえなかったし、貸本は一泊二日で5円ぐらいだったから、子供にとっては高いものだったしね。今の子は新聞配達なんかできないけど、当時は新聞配達とか牛乳配

達をすると褒められるぐらいだったからね。

そのうち貸本の読者コーナーに似顔絵を投稿するようになって、最初に載ったのが小学校6年のとき。読者コーナーには投稿者の住所も載ってたから、文通したりしているうちに友だちが増えていつて、同好会みたいなものが流行ったの。みんなから似顔絵を送ってもらって、それをガリ版で写し取って刷って。今みたいにスキャンとかできないからさ。ペンタッチも何もないよね(笑)。まあ、そんなので満足してたんだけどね。

絵を描くのは好きだったね。小さい頃から紙があれば何か描いていたという。道路にもチョークでいたりしていたし、学校の教科書も落書きだらけで。マンガが好きになったのは自然なことだよ。ね。クラスのなかでも絵がうまい子という感じで、賞状をもらったりしていたけど、絵の成績は良くなかった。だって建物を描いても、ガラスに線を入れ

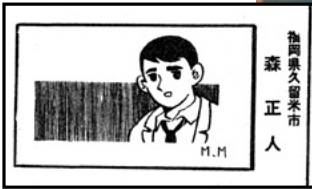
たりするわけ(笑)。まさにマンガ的表現だから、美術の先生からしたら許せないわけよ。人物を描いても、目がマンガみたいになってたからさ(笑)。先生にとっては扱いにくい生徒だったんじゃないの。

商業高校に進んだけど、この頃は自分は絶対マンガ家になれるという自信があったね。それで、高校三年のとき、就職試験で東京の会社を受けるこ

とになってね。その会社から東京までの旅費が出るんですよ。だからその会社を受ける名目で、ちばてつや先生のところに行つた。それまでに描きためたマンガを持つてね。でもちば先生のところはアシスタントはもう決まつていて断られちゃつた。でも、ちば先生を通して「少年マガジン」の人を紹介してもらつて。川崎のぼる先生のところに行きたいと言つ



貸本用単行本『ガン太郎日記』山本まさはる著(日の丸文庫発行)巻末の似顔絵のコーナーに投稿した俺の似顔絵も載っている。



貸本用単行本『愛を知るころ』ヒモトタロウ著(文華書房発行)巻末に俺の投稿作品『ひき逃げ』(3ページ)が掲載されている。



たら連絡を取ってくれて、それで決まったんですよ。当時は『あしたのジョー』と『巨人の星』が人気絶頂の頃で、やっぱり人気のある先生のところに行きたかったんだろうね。川崎先生は劇画の貸本出身の人だから憧れもあったしね。

あ、就職試験にも行ったよ(笑)。でも受かりたくないもんだから、筆記試験もメチャクチャ書いて、面接も横柄な態度を取ってたんだけど、受かったちゃった(笑)。もう断るのが大変だね。まあ試験は形だけで、合格することは最初から決まっていたよ。うなものだったから、担任の先生はもう平謝りだね。森くんがどうしてもマンガ家になりたいんだつたら、ということでもいろいろ手を尽くしてくれた。いい先生だったなあ。

俺がマンガ家になることについて、親は理解があったね。親父って割と遊び人だったみたいで、芝居が好きで、絵もちよつと描いていたことがあった



「COM」昭和42年11月号の「ぐら・こん」で投稿した作品「罪の意識」が佳作に入選し、掲載された。

罪の意識 (15ページ)

総合	32	森 正 人 (17歳)
ストーリー	55	キャラクター 60
絵	50	構成 45
コマ割り	60	総 55
	165	160

罪の意識

もうひとつふんばり

夢 (8ページ)

ストーリー	95	145
絵	240	
総合		240

福山 康治 (17歳)

らしいんだよ。俺もそういう血をちよつと引いてるかもしれない。お袋も応援してくれて、そういう意味では恵まれていたというか。マンガ家への夢が叶えられそうでき、毎日楽しくて仕方なかったね。その頃までは順風満帆だったよ。



アサヒグラフ昭和44年1月17日号の「特集・見ていだけじゃプロじゃない」の中で、肉筆回覧誌「開拓地」とともに紹介された。



川崎のぼるのアシスタントを経て
マンガの肥やしのために
フーテン生活へ

当時の川崎先生は、まさに全盛期だったと思う。

『巨人の星』『いなかっぺ大将』、あと『男の条件』を同時に連載してたからね。とにかく忙しくて、30分寝かせてくれとか、1時間経ったら起こしてくれ、とか。そんな感じでやってたから、今考えると、とてもじゃない状況だったと思う。川崎先生は速くてうまい人だったけど、仕事量がすごかったから、顔だけしか描かないんですよ。コマ割やデッサンをしたあとは顔だけ描いて、そのあとは人物の体を描くアシスタントがいて、背景を描く人がいて、仕上げがいて、という完全な分業制。そうしないと間に合わない。それでも1時間とか2時間の睡眠時間でやってたんだから。まったく自由がなくて。自分がやりたいことなんて何もできなかった。

川崎先生のところでは、消しゴムかけたりベタ塗ったり、そういう基礎的なことを教わったかな。先生はいい人で、よく面倒を見てくれたと思う。『巨人の星』を描いてはいたけど、野球のことはあまり知らなかったみたい。でも勉強しながらやつてたんじゃないかな。でも川崎先生の一番の持ち味は『いなかっぺ大将』だと思う。あのギャグとか人情とか。世間の評価とはちよつと違うけどね。

川崎先生の家は三鷹にあつて、そこにアシスタントみんなで住み込みで、タコ部屋みたいなところで寝てた。アシスタントの同期に大和田夏希くんがいました。彼は中学を出たばかりだったから、ほんと子供でね。夜みんな寝てからこつそり田舎に電話してたよ。彼の実家は北海道で長距離電話だったから高いわけ。それで先生の奥さんに怒られたりしていた。淋しかったんだろうね。

アシスタントのチーフで飯田ひろしさんという

人が、川崎先生の友だちだったんだけど、すごく上手な人ですつかり尊敬しちゃったんだよね。で、その人が言うには、時代のせいもあったんだけど、青年は荒野を目指さないといけない、と（笑）。川崎のぼるのところに安住していたらいいマンガは描けない。そういう空気を入れられちゃってさ。だからもう少し川崎先生のとこで修行すればよかったんだけど、1年で辞めちゃったんですよ（笑）。永島慎二の『フーテン』ってあつたでしょう。あれに憧れてね。リュック背負つて北海道行ったり、牧場で働きながら旅費を貯めたり、大阪では中華料理店で住み込みで働いたりね。これは将来描くマンガの肥やしになるんだという信念があつた。バカだよ。でも若かつたからさ。

当時はヒゲ生やして長髪でね。そんな感じで「少年サンデー」に持ち込みに行ったら、まだ使えるところまで行かない、ということ、で、学年誌を紹介し

でもらつてね。そこで『剣道一本!』というテレビドラマのコミカライズを描くことになった。それがデビュー作と言えばデビュー作。



週刊少年サンデーお正月臨時増刊号（昭和48年1月発行）に『食いだおれ源八』が掲載された。



そのあと「少年サンデー」で読み切りを何本か描いた。そのうちの一本、『食いだおれ源八』というマンガは、かつては凄腕の料理人だったけど、今は日雇い労働者の男が主人公で、今で言うグルメマンガのはしりだったと思う。そういった職人が出てくるようなマンガを描きたいと思っていたところに、双葉社の「パワーコミック」で、コーヒーとか、酒をつくる話とか、職人ものの読み切りをやったのよ。でも職人のことを描くとなると、その世界を知らないで描けないじゃない。だから本を読んだり取材にも行った。花火職人のことを描いたときは、つくばの方にある花火工場に行ったりしたな。

ひとつの職業でずっと描き続けられればいいんだけど、読み切りで毎回違う職業のことを描くなんて無理。尾瀬あきらの『夏子の酒』ってあるじゃない。俺も酒造りのマンガを描いたけど、もう一夜漬けで描いてるわけ。でも『夏子の酒』はたぶんす

ごく取材をして、何年もかけて描いているわけよ。そういう感じだったら続けられたけどね。たとえば『食いだおれ源八』を連載にすればいいけたかもしれない。でも当時は続きを描こうという発想はなかった。アドバイスをしてくれる編集者もいなかったし。これはこれで終わり、という。もし連載していたら、『包丁人味平』より前だったし、グルメマンガとしてうまく行ったかもしれないね。



「マンガくん」 昭和52年6月10日号から『土佐からきたカツオ』を連載。スポーツギャグマンガにも挑戦した。



劇画と少年マンガの間で揺れて
混乱期を越えてたどりついた先は

「パワーコミック」のあとは、小学館の「マンガく」で描くようになった。だから青年誌と少年誌を行ったり来たりしていたかな。劇画にしても、少年マンガにしても両方とも俺の絵だから、それほどこだわりはなかったけれど、とにかく仕事をしなきゃいけないし、どっちが仕事になるんだろうと思いつながら、結局、中途半端になっちゃたんだよね。「マンガくん」も売れ行きが悪くて休刊になっちゃってさ。そのあとだんだん仕事がなくなつて、生活も苦しくなつてね。マンガじゃ食べられないからコックになろうと思つてさ。だからコックの修行もやったんだよ。料理を作るのも好きだったし。それから建設作業のアルバイトもしたりしてね。でもマンガも諦め切れなくてさ。大和田くんが「少年マガジン」で

『タフネス大地』の連載を始めたときは、アシスタントをやったりした。まあとにかくいろいろ。混乱期というか(笑)。それからずっとそんな感じですよ。

今回「新つれづれ草」に参加することになったのは、長年の友人、おだ辰夫くんに誘われたからなんだけど、なかなか新しいマンガを描く気になれなくてね。それで当時描いた『幽鬼』を載せてもらお

『あばれ竜』(高橋書店発行)



うと思ってさ。けっこう模索しているときに描いたものなんだけど、俺もこれくらいの娯楽作は描けるんだぞというね。これね、最初「少年サンデー」に持っていったんですよ。編集者の評価は高かったんだけど、主人公がお金のため野球をやるようなマンガは駄目だつて(笑)。それなら「パワーコミック」なら行けるだろうと思って持って行つたのよ。そして一発で気に入ってくれて載せてくれたんだよ



『球心の伝蔵』(高橋書店発行)「少年サンデー」で発表した短編6作品を収録。『食いだおれ源八』も収録されている。

ね。自分で言うのも何だけど、割とよくできている
(笑)。

新作？ うーん、どうなんだろう。なんせまともに描かなくなつて20年ぐらい経つからさ。手が震えて駄目なんじゃないかと思うよ。今は趣味で水彩画とか水墨画を描いてるけどさ。まあ楽しいよね、絵を描くのは。

●インタビューを終えて

このインタビューの前に『幽鬼』を読んだのですが、ものすごく面白くて興奮してしまいました。実際お会いした森さんの話は、これまでの「新つれづれ草」のマンガ家さんにはない空気を纏つていて、描くマンガに負けず劣らず面白かったです。次号ぜひ新作を描いてください！

文・中島泰司

2017年5月9日

東京練馬駅近くの喫茶店にて

